

創世記31-32章 「ベテルの神の呼びかけ」

1A ラバンの家から 31

1B ラバンから取り上げられた神 1-16

1C 父の態度の変化 1-9

2C 夢の中での神の使い 10-16

2B 神に抑制された確執 17-42

1C 欺きの出発 17-21

2C ラバンの脅し 22-30

3C テラフィムの盗み 31-35

4C 労苦を顧みた神 36-42

3B ミツパの契約 43-55

1C 石塚の証拠 43-48

2C 主の見張り 49-55

2A エサウを前にして 32

1B 御使いの陣営 1-5

2B 恐れるヤコブ 6-21

1C 対策と祈り 6-12

2C 不要な宥め 13-21

3B イスラエルという新しい名 22-32

1C 御使いとの格闘 22-29

2C 足をひきずるヤコブ 30-32

本文

創世記 31 章に入ります。私たちは前回、ヤコブが、伯父ラバンの家で働き続けたところを見ました。ついに、20 年後、そこから出て行くことになります。そして、ヤコブの人生にとって、また神のご計画にとって、非常に大切になる出来事、ヤコブの御使いとの格闘の場面が出てきます。

1A ラバンの家から 31

1B ラバンから取り上げられた神 1-16

1C 父の態度の変化 1-9

¹ ところで、ヤコブはラバンの息子たちが、「ヤコブはわれわれの父の物をみな取った。父の物で、このすべての富をものにしたのだ」と言っているのを聞いた。

これは、事実ではありません。ラバンの家畜から、ぶち毛のもの斑毛のもの、縞毛のものが自分

の報酬になるということについて、ラバンはそれでよいと言っていました。次々と、これらの羊ややぎが生まれ、それで財を成して行きました。そこに嘘偽りはありません。ラバンの息子たちの発言は、たんなる妬みでしかありません。思い出してください、父イサクもそうでした。彼を主が祝福し、非常に裕福になったので、それで、ペリシテ人が彼を妬んで、追い出したのです。

² ヤコブがラバンの態度を見ると、はたして、それは彼に対して以前のようにではなかった。³ 主はヤコブに言われた。「あなたが生まれた、あなたの父たちの国に帰りなさい。わたしは、あなたとともにいる。」

ラバンがヤコブに対して苛立ち、疑いの目で見ようになっています。しかし、それが、ついに彼が故郷に帰る機会を与えました。主がヤコブに語られたのです。「28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」連れ帰ると、ベテルに現れた神が語って来られましたが、「今がその時だ」と語ってくださったのです。

私たちが、主の導きを求める時に、いつまで行うべきか？と思うことがあるかもしれません。けれども、何か不快なこと、不本意なこと、否定的なことが起こった時、それが実は、主が、次のところに行きなさいという、しるしかもしれません。

⁴ ヤコブは人を送って、ラケルとレアを自分の群れのいる野に呼び寄せ、⁵ 彼女たちに言った。「私は、あなたたちの父の態度が以前のようにではないのに気づいている。しかし、私の父の神は私とともにおられる。」

妻二人を、自分の群れのところにまで連れて来ています。情報が漏れること、三人だけになることを願っていたのかもしれません。そして、彼の信仰がここにあります。「私の父の神は私とともにおられる」ということです。

⁶ あなたたちがよく知っているように、私はあなたたちの父に、力を尽くして仕えてきた。⁷ それなのに、あなたたちの父は私を欺き、私の報酬を何度も変えた。しかし神は、彼が私に害を加えることを許されなかった。⁸ 彼が『ぶち毛のものはあなたの報酬になる』と言えば、群れのすべてがぶち毛のものを産んだ。また、『縞毛のものはあなたの報酬になる』と言えば、群れのすべてが縞毛のものを産んだ。

ヤコブは、ラバンにしっかりと仕えてきました。ラバンは報酬を何度も変えましたが、主がそれでも、ラバンが害を自分に加えることのないようにしてくださったのです。いろいろ、不当なことをされても、それでも蓋を開いたら、主が十分に余りあるようにされたという憐れみと恵みがありますね。

⁹ こうして神は、あなたたちの父の家畜を取り上げて、私に下さったのだ。

これは、本来ならヤコブのものになるはずなのに、ラバンがずっと不正に取り上げていたのを、神が正しくさばき、取り返されたのだという意味です。

2C 夢の中での神の使い 10-16

¹⁰ 群れのやぎにさがりがついたとき、私が夢の中で目を上げて見ると、見よ、雌やぎと交尾している雄やぎは、縞毛、ぶち毛、斑毛ばかりであった。¹¹ すると、神の使いが夢の中で私に『ヤコブよ』と言われた。私は『はい』と答えた。¹² 御使いは言われた。『目を上げて見よ。雌やぎと交尾している雄やぎはみな、縞毛、ぶち毛、斑毛である。ラバンがあなたにしてくいたことはみな、わたしが見た。

ヤコブが、ここまではっきりと、神が取り上げてくださったと言えたのは、神の使いが現れてくださったからです。

¹³ わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。』」

そうです、この御使いは、神ご自身だったのです。御使いなのに神ご自身だということは、多くの人が、肉体として生まれる前のイエス・キリストだと言います。

主があの方に、天のはしごの夢の中で現れてくださいました。そして、今、御使いによってご自身を示して、この土地を出て、国に帰りなさいと命じておられるのです。ヤコブは、本当に愛されていると思います。天のはしごの時に、はしごには御使いが上り下りしていましたが、これからも御使いが現れます。次の章で、エサウと出会う前に御使いの陣営がヤコブの群れと共にいましたし、最後はついに、御使いがヤコブと格闘されます。こうやって、ヤコブには、一切の危害が加えられないように、神がご自身の使いを遣わし、彼を守っておられたのです。

私たちが、アロンの祝祷を午前礼拝の終わりに祈りますが、「主があなたを祝福し、あなたを守られますように(民 6:24)」であります。主イエスご自身も祈られました。「ヨハ 17:11 わたしはもう世にいません。彼らは世にいますが、わたしはあなたのもとに参ります。聖なる父よ、わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。」

¹⁴ ラケルとレアは答えた。「私たちの父の家には、相続財産で私たちの取り分がまだあるでしょうか。¹⁵ 私たちは父に、よそ者と見なされているのではないのでしょうか。あの人は私たちを売り、しかもその代金を食いつぶしたのですから。

ラケルもレアも、夫に全く同意でした。自分自身も、物であるかのように売られたと感じていたのです。ヤコブに対する嫁になって、その結納金のために彼が働いたのですが、父は、その代金を食いつぶしてきたのを見てきたようです。

¹⁶ 神が私たちの父から取り上げた富は、すべて私たちのもの、また子どもたちのものです。さあ、神があなたにお告げになったことを、すべてなさってください。」

自分の父でありますから、娘たちとして未練があってはなりません。ヤコブは二人にそれを確認したかったのですが、彼女たちは全くありませんでした。

2B 神に抑制された確執 17-42

1C 欺きの出発 17-21

¹⁷ そこでヤコブは立って、彼の子たち、妻たちをらくだに乗せ、¹⁸ また、すべての家畜と、彼が得たすべての財産、彼がパダン・アラムで自分のものとした家畜を連れて、カナンの地にいる父イサクのところへ向かった。¹⁹ そのとき、ラバンは自分の羊の毛を刈りに出ている。ラケルは、父が所有しているテラフィムを盗み出した。

ヤコブたちが出て行く時、自分たちのすべての財産を持っていきましたが、ラケルがラバンのものを盗みました。「テラフィム」です。これは、家に安置する偶像です。けれども、それは家の財産権を主張するための印でもありました。それで、ラケルは、ラバンの財産は私たちのもの、というメッセージを、皮肉を込めて伝えたかったのでしょうか。しかし、偶像は偶像です。後で、この持ち出しが、ヤコブの家にとって禍根となります。

²⁰ ヤコブはアラム人ラバンを欺いて、自分が逃げるのを彼に知られないようにした。

まるでスパイ活動をするかのように、偽情報によって、ラバンの目をはぐらかしたのだと思います。これまでラバンに騙されていたところから、ヤコブがラバンを騙すという、形勢が変わりました。

²¹ 彼は自分のものをすべて持って逃げた。彼は立ち去ってあの大河を渡り、ギルアデの山地の方へ向かった。

あの大河とは、ユーフラテス川のことです。そして、「ギルアデの山地」であります。これは、ガリラヤ湖と死海の間にある、ヨルダン川の東岸地域です。山地とありますが、言ったことがあります。ガリラヤ湖を南東からヨルダンの側から眺めたことがあります。そこに行く時、本当に凸凹していました。上りの坂道の後には、急な下りです。

そして、ヨルダン川を渡ればカナンの地です。かつてアブラハムも、ハランからカナンの地に来る時は、ここを通ったに違いありません。

2C ラバンの脅し 22-30

²² 三日目に、ヤコブが逃げたことがラバンに知らされた。²³ ラバンは身内の者たちを率いて、七日の道のりを追って行き、ギルアデの山地でヤコブに追いついた。²⁴ 神は夜、夢でアラム人ラバンに現れて仰せられた。「あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにしなさい。」

意味あり気な、数字が出てきますね。三日目ですから、ちょうど主が死者の中からよみがえられたのが三日目です。そして七日は、神が天地を創造された期間であり、神の数字です。これから、ラバンがヤコブを責めますが、ヤコブには主がおられます。ヤコブがもっと力を込めて、ラバンを責めて、ついにラバンの家から出ることができます。

ここで主は、ヤコブたちを守られています。ラバンは、まじないをするような異教徒です。主なる神、ヤハウェのことは知っていますが、偶像礼拝者です。しかし、その彼に対して、まことの神が夢で語られたのです。事の善悪を論じるなど戒められています。

²⁵ ラバンはヤコブに追いついた。そのとき、ヤコブは山地に天幕を張っていたが、ラバンもギルアデの山地に身内の者たちと天幕を張った。²⁶ ラバンはヤコブに言った。「何ということをしたのか。私を欺いて、娘たちを、剣で捕らえられた者のように引いて行くとは。²⁷ なぜ、あなたは逃げ隠れて私を欺き、私に知らせなかったのか。タンバリンや竖琴で喜び歌って、あなたを送り出したらどうに。²⁸ しかもあなたは、私の孫や娘たちに口づけもさせなかった。あなたは全く愚かなことをしたものだ。

祝福して送り出したのにと詰っていますが、全くの嘘です。

²⁹ 私には、あなたがたに害を加える力があるが、昨夜、あなたがたの父の神が私に、『あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにせよ』と告げられた。

ここです、ラバンはヤコブたちに危害を加えるつもりだったのです。それを、アブラハムの神、イサクの神が、やめさせたのです。主が、この悪を引き止められました。

³⁰ それはそうと、あなたは、あなたの父の家がどうしても恋しくなって出て行ったのだろうが、なぜ私の神々を盗んだのか。」

とても滑稽な発言です。盗むことのできる神々なんですね。これから一生懸命探しますが、一所懸命探さないといけない神々なんですね。まことの生ける神は、私たちの助けを必要としません。

重荷となりません。むしろ、私たちを助け、私たちの重荷を担われる方です。

3C テラフィムの盗み 31-35

³¹ ヤコブはラバンに答えた。「あなたがご自分の娘たちを私から奪い取りはしないかと思って、恐れたのです。

ラバンをだまして出て行ったことについての、返答です。

³² あなたがご自分の神々をだれかのところで見つけたら、私はその者を生かしておきません。私のところに何があるか、私たちの一族の前で、ご自分で調べてください。そして持って行ってください。」ヤコブは、ラケルが盗んだことを知らなかったのである。

まさかラケルが盗んだことを知らないので、「私はその者を生かしておきません」と断言します。

³³ そこで、ラバンはヤコブの天幕とレアの天幕、また二人の女奴隷の天幕に入って行っただが、見つからなかった。彼はレアの天幕を出て、ラケルの天幕に入った。³⁴ ところが、ラケルはすでにテラフィムを取って、それらをらくだの鞍の中に入れ、その上に座っていたので、ラバンが天幕を隅々まで調べても見つからなかった。³⁵ ラケルは父に言った。「父上、どうか怒らないでください。私はあなたの前で立ち上がることができません。女の常のことがあるからです。」彼は捜したが、テラフィムは見つからなかった。

ラケルは、上手にテラフィムを隠しました。

4C 労苦を顧みた神 36-42

³⁶ するとヤコブは怒って、ラバンをとがめた。ヤコブはラバンに向かって言った。「私にどんな背きがあり、どんな罪があるというのですか。私をここまで追いつめるとは。³⁷ あなたは私の物を一つ残らず調べて、何か一つでも、あなたの家の物を見つけましたか。もしあったなら、それを私の一族と、あなたの一族の前に置いて、彼らに私たち二人の間をさばかせましょう。

テラフィムをラバンは捜しているのですが、ヤコブはこのことでついに切れて、これまでの抑えてきた思いを、一気に吐き出します。

³⁸ 私があなたと一緒にいた二十年間、あなたの雌羊も雌やぎも流産したことはなく、また私はあなたの群れの雄羊も食べませんでした。

流産をさせなかったというのは、相当のきめ細かい世話をしたということです。そして、羊飼いは、

その分け前の一部を受け取っても、なんら咎められません。だから羊を食べても良かったのですが、ヤコブはそれをやりませんでした。

³⁹ 野獣にかみ裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かずに、私が負担しました。それなのに、あなたは昼盗まれたものや夜盗まれたものについてまでも、私に責任を負わせました。

野獣にかみ裂かれたのは、全く羊飼いの責任ではありません。それまでもヤコブは自分で負担しました。また盗まれたものについて、ラバンは不当にヤコブに責任を負わせます。

⁴⁰ 私は昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできませんでした。

それに加えて、羊飼いをしている時に、昼の暑さ、夜の寒さで身にこたえていました。

⁴¹ 私はこの二十年間、あなたの家で過ごし、十四年間はあなたの二人の娘たちのために、六年間はあなたの群れのために、あなたに仕えてきました。しかも、あなたは何度も私の報酬を変えました。

これが、ラバンの家における要約です。二十年間、実質、無償の労働です。初めの十四年は娘たちのために働き、残りの六年も、全く不利な状況で羊とやぎを飼わせられていました。しかも、その間、ああだこうだといって、報酬を変えてきました。

⁴² もし、私の父祖の神、アブラハムの神、イサクの恐れる方が私についておられなかったなら、あなたはきっと何も持たせずに私を去らせたことでしょう。神は私の苦しみとこの手の労苦を顧みられ、昨夜さばきをなさったのです。」

これは、その通りでしょう。ラバンは、無一文でヤコブを去らせたと思います。しかし、ここで神がご介入されました。そして、ラバンのだましと不正に対して、裁かれました。

3B ミツパの契約 43-55

1C 石塚の証拠 43-48

⁴³ ラバンはヤコブに答えた。「娘たちは私の娘、子どもたちは私の子ども、群れは私の群れ、すべてあなたが見るものは私のもの。この私の娘たちに対して、または、娘たちが産んだ子どもたちに対して、今日、私が何をするというのか。

ラバンは、全く思い直すことはありません。むしろ、自分の貪欲な心を露わにしています。すべて、ヤコブのものです。それをすべて自分のものと言い張っています。だから、ラバンがヤコブを、無

一文で去らせるといったヤコブの恐れは、その通りなのです。

⁴⁴ さあ今、私とあなたは契約を結び、それを私とあなたとの間の証拠としよう。」

ラバンのほうから、なんと契約を結ぼうと言っています。神に戒められているので、これ以上のことができないのです。

⁴⁵ そこで、ヤコブは石を取り、それを立てて石の柱とした。⁴⁶ ヤコブは自分の一族に言った。「石を集めなさい。」そこで彼らは石を取り、石塚を作った。彼らは石塚のそばで食事をした。⁴⁷ ラバンはそれをエガル・サハドタと名づけたが、ヤコブはこれをガルエデと名づけた。⁴⁸ そしてラバンは言った。「この石塚は、今日、私とあなたとの間の証拠である。」それゆえ、その名はガルエデと呼ばれた。

どちらも「証しの塚」という意味ですが、ラバンはアラム語で、ヤコブはヘブル語で名乗っています。食事をしているのは、契約の時に行います。食事をする時に争うことができませんね。平和でないといけません。食事が一つになることを象徴して、それで平和を結ぶことを示しています。

2C 主の見張り 49-55

⁴⁹ また、それはミツパとも呼ばれた。彼がこう言ったからである。「われわれが互いに目の届かないところにいるとき、主が私とあなたとの間の見張りをされるように。⁵⁰ もし、あなたが私の娘たちをひどい目にあわせたり、娘たちのほかに妻をめとったりするなら、たとえ、だれもわれわれとともにいなくても、見よ、神が私とあなたとの証人である。」

「ミツパ」は、「見張る」という意味です。ラバンが、自分の娘にひどい目に合わせたら、神が見張っているぞ、というということです。

⁵¹ また、ラバンはヤコブに言った。「見なさい、この石塚を。そして見なさい、あなたと私の間に私が立てた、この石の柱を。⁵² この石塚が証拠であり、この石の柱が証拠である。私は、この石塚を越えてあなたのところに行くことはない。あなたも、敵意をもって、この石塚やこの石の柱を越えて私のところに来てはならない。

石塚は、互いにここを越えて危害を加えないという証拠としています。

⁵³ どうか、アブラハムの神、ナホルの神、彼らの父祖の神が、われわれの間をさばかれるように。」ヤコブも、父イサクの恐れる方にかけて誓った。

ラバンは、ナホルからの家なので、アブラハムの神だけでなく、ナホルの神と言っています。そし

て、ラバンが逆に、ヤコブがこの契約を破ったらさばかれるようにと迫っています。けれども、ヤコブも全くその気はないですから、同意しています。そして、誓いを立てます。彼は、アブラハムの子イサクの神に誓っています。

⁵⁴ ヤコブは山でいけにえを献げ、一族を食事に招いた。彼らは食事をして、山で一夜を明かした。
⁵⁵ 翌朝早く、ラバンは孫と娘たちに口づけして、彼らを祝福した。それからラバンは去って、自分の所へ帰った。

契約が結ばれて、いけにえを献げています。そして食事をしています。神の前における契約だということを示しています。そしてついに、ラバンは娘と孫たちに口づけして、祝福しました。そして去っています。

主の守りによって、無事にラバンの家から離れることができました。

2A エサウを前にして 32

しかし、次が、ヤコブにとっては、とてつもない大きな課題です。ラバンの家から出るのも難儀ですが、次は、故郷に戻るにあたって、エサウに会わないといけないのです。

ヤコブにとっては、これははるかに、難しいです。ラバンとの確執、対決は、いわば、世との戦いです。外からの圧迫です。ヤコブには、きよい良心がありました。誠実に働いたし、自分に落ち度はなかったからです。だから、強く訴えられました。けれども、エサウと会うのは、肉の戦いです。自分自身の内にある、負い目です。兄を自分はだましたのです。だから、彼は兄と和解しないといけません。でないと、殺されます。

私たちも同じではないでしょうか？最大の敵は自分自身という言葉がありますが、世の友になって、神の敵になってはいけないと、ヤコブが手紙の中で言いましたが、ある意味、これはできます。けれども、自分自身の負い目、肉に対しては、痛みをとまいます。その戦い、葛藤になります。

1B 御使いの陣営 1ー5

¹ さて、ヤコブが旅を続けていると、神の使いたちが彼に現れた。² ヤコブは彼らを見たとき、「ここは神の陣営だ」と言って、その場所の名をマハナインと呼んだ。

ヤコブは、天のはしごから始まり、夢の中でベテルの神が現れ、ラバンにも神が語られ、そして今、ここで御使いが陣営をなして現れています。マハナインはマハネ(陣営)の複数形です。こうやって、ヤコブは主が自分を、守られるのだということを知りました。ところが、です。

³ ヤコブは、セイルの地、エドムの野にいる兄のエサウに、前もって使いを送った。

この時にはすでに、エサウはセイル地方に動いていました。そこは、死海の南、紅海に至るまでの地域です。岩山が連なっているところで、有名なのは、ナバタイ王国の首都であったペトラです。そこは元々、エドムの都ボツラであったと言われています。

⁴ ヤコブは彼らに命じた。「私の主人エサウにこう伝えなさい。『あなた様のしもべヤコブがこう申しております。私はラバンのもとに寄留し、今に至るまでとどまっていました。⁵ 私には牛、ろば、羊、それに男女の奴隷がおります。それで私の主人であるあなた様にお知らせして、ご好意を得ようと使いをお送りしました。』」

あくまでも、自分はエサウのしもべとして、下手に出て接近しようとしています。

2B 恐れるヤコブ 6-21

1C 対策と祈り 6-12

⁶ 使者は、ヤコブのもとに帰って来て言った。「兄上エサウ様のもとに行って参りました。あの方も、あなたを迎えにやって来られます。四百人があの方と一緒にいます。」

これは、そのままヤコブたちをみな、打ち倒すためにやってきてるとも考えられます。それで、せっかく、マハナイムで、神の陣営をヤコブは見たのに、すっかり忘れて恐れに駆り立てられます。

⁷ ヤコブは非常に恐れ、不安になった。それで彼は、一緒にいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けた。⁸「たとえエサウが一つの宿営にやって来て、それを打っても、もう一つの宿営は逃れられるだろう」と考えたのである。

午前礼拝で学びました、ヤコブの問題は、自分が賢く動けるということです。自分で出来てしまう、その能力です。生まれる時、兄のかかとをつかむ、あの力です。ここでは、確かに宿営を二つに分けることは、賢い方策です。どちらかが打たれても、その間に逃げることができます。

⁹ ヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。私に『あなたの地、あなたの生まれた地に帰れ。わたしはあなたを幸せにする』と言われた主よ。

ヤコブが祈り始めます。ここから多くを学ぶ事ができます。まず、神がだれなのかをはっきりさせています。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神」です。この方は契約の神、約束を守られる方です。こうやって、だれに祈っているのかをはっきりさせます。

次に、この方が約束してくださったことを思い起こさせています。私たちは、祈るときに、神がみことばで語られたことを、神ご自身に訴えること。とても良いです。ご自身が語られたことを持ち出されるのですから、神は聞かざるをえませんね！

¹⁰ 私は、あなたがこのしもべに与えてくださった、すべての恵みとまことを受けるに値しない者です。私は一本の杖しか持たないで、このヨルダン川を渡りましたが、今は、二つの宿営を持つまでになりました。

神の恵みとまことをヤコブは語っています。自分がどれだけ、卑しいところから始まったかを彼は知っていました。一本の杖しか持っていなかったのです。しかし今、二つの宿営があります。これだけ主が恵みを施してくださったから、今も救ってくださいとお願いしています。

¹¹ どうか、私の兄エサウの手から私を救い出してください。兄が来て、私を、また子どもたちとともにその母親たちまでも打ちはしないかと、私は恐れています。

正直に告白しています。「私は恐れています」と。きれいに祈りをまとめるのと、そうではないことを、正直に語ることと、どちらが祈りとして優れているでしょうか？後者です。主は、私たちの心をすべてご存知だからです。そして、正直に語り、主に正されたり、悔い改めに導かれるとよいのです。「あの人のことを、もっと愛せますように。」ではなく、「あの人のことが大っ嫌いです。見るだけで、虫唾が走ります。こんな悪い思いを、あなたのしもべに対して抱いています。お赦してください。主よ、この汚い心を、憐れんでください、清めてください。」というように、祈ればいいですね。

¹² あなたは、かつて言われました。『わたしは必ずあなたを幸せにし、あなたの子孫を、多くて数えきれない海の砂のようにする』と。』

再び、約束を持ち出しています。もし子孫を増やしてくださるなら、今ここで、自分だけでなく、妻たちも子どもたちも殺されたら、約束がかなえられないではないか、ということです。

2C 不要な宥め 13-21

こうやって祈るのですが、主を待ち望むのではなく、また、不必要な方策を考えます。それは、エサウを宥める方法です。

¹³ その夜をそこで過ごしてから、ヤコブは自分が手に入れたものの中から、兄エサウへの贈り物にするものを選び出した。¹⁴ 雌やぎ二百匹、雄やぎ二十匹、雌羊二百匹、雄羊二十匹、¹⁵ 乳らくだ三十頭とその子、雌牛四十頭、雄牛十頭、雌ろば二十頭、雄ろば十頭。

ものすごい数の家畜ですね。どれほど裕福になっていたかが分かります。

¹⁶ 彼は、しもべたちの手にそれぞれ一群れずつを渡し、しもべたちに言った。「私の先を進め。群れと群れの間には距離をおけ。」¹⁷ また、先頭の者に命じた。「もし私の兄エサウがあなたに会い、『あなたは、だれに属する者か。どこへ行くのか。あなたの前のこれらのものは、だれのものか』と尋ねたら、¹⁸『これらは、あなた様のしもべヤコブのものでございます。ご主人のエサウ様に差し上げる贈り物でございます。ご覧ください。ヤコブもうしろにおります』と答えよ。」

前もって贈り物を送ります。

¹⁹ 彼は第二の者にも、第三の者にも、群れ群れについて行くすべての者に命じた。「あなたがたがエサウに出会ったら、これと同じことを告げよ。」²⁰ また、『ご覧ください。あなた様のしもべヤコブは、私どものうしろにおります』と言え。」ヤコブは、「自分の先に行く贈り物で彼をなだめ、その後で彼と顔を合わせよう。もしかすると、私を受け入れてくれるかもしれない」と思ったのである。²¹ こうして贈り物は彼より先に渡って行っただが、彼自身は、その夜、宿営にとどまっていた。

三つの群れに分けて、少しずつ贈り、それで彼の怒りを宥めようとしています。次の章で分かりますが、そんなこと必要なかったのです。

3B イスラエルという新しい名 22-32

1C 御使いとの格闘 22-29

²² その夜、彼は起き上がり、二人の妻と二人の女奴隷、そして十一人の子どもたちを連れ出し、ヤボクの渡し場を渡った。²³ 彼らを連れ出して川を渡らせ、また自分の所有するものも渡らせた。

「ヤボクの渡し」は、今のヨルダンの首都「アンマン」辺りから、ヨルダン川中流に流れ込む、東から西へ流れている川です。ヨルダンは高地で、ヨルダン川の左右が溪谷で低地になっており、そのためヨルダン川を渡る時は、ヤボク川など、その高地をゆっくり下降できる、なだらかな所としてその川沿いを歩きます。先に話したように、アブラハムも、ユーフラテス川から約束の地に入る時も、このヤボクの渡しを渡ったでしょう。

²⁴ ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。

ここで、ヤコブがなぜ、自分独りだけヤボクの渡し場の手前にいたのか、分かりません。けれども、ゲッセマネの園でイエスがお独りでおられたように、他の弟子たちと少し距離を取られたように、独りでいたかったのかもしれない。

その時に、マハナイルでずっと守っていた、その御使いの自衛を指揮しておられたのでしょうか、御使いがやってきて、ヤコブと格闘しました。この方の正体は、人であり、かつ神であることが明らかです。主の使いであり、かつ主ご自身です。イエス・キリストご自身だという意見が多いです。

なぜ格闘したのか？そのことを午前礼拝でじっくり学びました。ホセア書 12 章にある言葉をもう一度、読みます。「12:3-4 ヤコブは母の胎で兄のかかとをつかみ、その力で神と争った。4 御使いと格闘して勝ったが、泣いてこれに願った。ベテルでは神に出会い、神はそこで彼に語りかけた。」ヤコブが、エサウの足をつかんだその力で、彼はこれまで生きてきました。彼は、エサウに会うことについて、自分で何とかしようとする力がありました。しかし、神が何とかするという意志、みこころがあります。その彼の力と、神が何とかするという力のガチンコになったのです。

²⁵ その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた。

私たちの主においては、壮絶な祈りの中で、父なる神にお任せになりました。自分はこの杯は過ぎ去らせてほしいけれども、父の願われるようになるようにと祈られました。けれども、ヤコブはそれをしませんでした。何とかするという力で、神のなされようということまでも自分でやろうとしていました。それが、この人がヤコブに勝てないと思った理由です。

それで、ももの関節を打ったのです。そして関節が外れました。主が、愛しているゆえに、このようにヤコブの力を取ったのです。ヤコブがもはや、自分の力でエサウから逃げることができなくなりました。このように、主は、私たちが自分の強い意志を使う時に、敢えてそれを折って、私たちが、何もできないようにされます。

²⁶ すると、その人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」ヤコブは言った。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」

キリストの弟子たちもそうでしたが、イエスが去ろうとしても、自分たちで強くお願いして、宿泊しています。ヤコブは、ここで立ち去ってほしくなかったのです。彼の願いは、約束を受け継ぐこと、その祝福を得ることです。弱くなっても、そうなのです。

²⁷ その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は言った。「ヤコブです。」²⁸ その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」

新しい名が、イスラエルです。これも午前礼拝でお話しましたが、神に勝つという意味もあるし、

神が支配するとも言えます。また神の王子とも言えます。自分が弱くされて、神に勝っているのです。あるいは、自分が弱くされて、神が支配され、自分が神の王子としての地位を得ています。

そして、ここで、神と勝って、人と勝っていると言っていますね。人として現れているけれども、神ご自身なのです。なので、イエス・キリストご自身ではないか？ということです。

イスラエルの歴史は、ずっとこれです。敵に囲まれ、現実的に動く側面があり、自分の力によって救われようとします。しかし、主に拠り頼み、どうしようもなくなっている時に、主に呼び求めたら、主が救われたということもあります。終わりの日は、自分たちは何も救うことができなくなり、メシアを求めたら、かつて突き刺した方であることを知って、それで嘆き悲しむのです。悔い改めます。

²⁹ ヤコブは願って言った。「どうか、あなたの名を教えてください。」すると、その人は「いったい、なぜ、わたしの名を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。

ヤコブも、名前を尋ねました。彼は、この方を知りたかったのです。主ご自身を知りたいという、強い願いは、信仰者の究極の願いではないでしょうか？けれども、それは明かしません。ただ祝福しただけです。でも、ヤコブはもうわかっていました。神ご自身であると。

2C 足をひきずるヤコブ 30-32

³⁰ そこでヤコブは、その場所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」という意味である。

ペヌエルが、神の御顔という意味です。ヤコブは、神と会っていた、神と格闘していたのを知ったのでした。

³¹ 彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのものために足を引きずっていた。³² こういうわけで、イスラエルの人々は今日まで、ももの関節の上の、腰の筋を食べない。ヤコブが、ももの関節、腰の筋を打たれたからである。

そう、彼にとっての格闘は、夜でした。一人で、自分のいわば闇の部分での力でした。そこを主に取り扱いいただき、今、夜が明けて、ぴっこを引いています。次回、抱擁するエサウを見ます。主が、彼の心を変えておられたのです。私たちがどんなにやっても、全くびくともしないことを、主は一瞬のうちにしてくださる方です。

そして、ももの関節の部分、腰の筋肉を食べないことによって、主がヤコブを取り扱われたことを思い起こしているようです。私たちもヤコブの、この体験を思い起こしましょう。